

## JIRCAS-CAAS 農業科学技術研究協力 20 周年記念シンポジウム 挨拶

小山修 JIRCAS 理事

JIRCAS は、前身の熱帯農業研究センターの 1980 年代から、中国の研究機関との間でイネ、野菜、乾燥地農業等の個別課題での共同研究を実施してきましたが、1993 年に国際農林水産業研究センターに改組となり、異なる分野の専門家が一緒に問題解決を図る総合型のプロジェクトが企画され、その一つとして中国農業科学院との間の共同研究が開始されました。日中農業科学技術交流グループ会議の指導の下、日中双方から知恵を出し合い、研究者の専門性を最大限に発揮し、社会のニーズに対応する研究テーマを探り、1997 年に正式に共同研究が開始されました。私のはじめての中国訪問も、1997 年 11 月、当時唐院長が所長を務めていた農業自然資源和農業区画研究所などでの研究計画の協議のための訪問でした。

本共同研究が、その後 4 つの共同研究プロジェクトに引き継がれ、20 年の節目を迎えたことは感慨深いものがあります。この 20 年間は、中国において経済発展が顕著であった時期でもあり、農業を取り巻く環境も大きく変化してきました。そのことは、共同研究プロジェクトの内容にも反映されています。第 1、2 期では、持続的生産や安定供給がキーワードとなっており、単なる増産でなく持続性や安定性の視点が重視されました。第 3、4 期では、環境調和型、循環型といった言葉がキーワードとなり、農業の「質」が追求されました。さらに現在実施中の第 5 期では、高付加価値化やフードバリューチェーンをキーワードに、生産・加工・流通だけでなく、消費の現場も一体として捉える研究となっています。それぞれの研究プロジェクトの立案時には、多くの同僚と熱心に議論したことを思い出します。

研究内容は、時間とともに変遷しましたが、当初から変わらなかったのは、双方の研究者間の対等で友好的な交流関係だと確信しています。もちろん、単に友好的であるというだけでなく、研究者として、共に学び、互いの技量を高めてきました。そして数多くの有益な研究成果が得られたことは、今日のこれからのセッションにおいて、関係者から示していただけたと思います。個人的な感想ではありますが、農業研究協力の分野は、両国関係に紆余曲折がある中でも一貫して研究者間の対等な協力関係を維持してきたという点において、広範な日中協力のなかでも誇るべき優良事例ではないかと思えます。

20 年間というのは、日中交流の長い歴史から見れば極めて短期間で、両国の経済規模と比較すれば僅かな活動であったかもしれませんが、JIRCAS と中国農業科学院との共同研究は、特筆すべき素晴らしい交流の一足跡であると思えます。そしてこの協力は、現在進行形として、将来の発展につながっています。今、日本と中国は、食の高度化、高齢化、資源制約などの共通の課題を抱え、アジア地域のみならず、人類全体の食料・環境問題を一緒に解決していくべき立場にあると思えます。20 年の土台の上に、両国の異なる知見を

融合して新たな価値を創出する、本日がそのスタートの日となるよう、両機関の良い関係がこれから益々発展していくよう、私も微力を傾注したいと思います。最後に、多くの両国関係者のこれまでのご指導、ご助力、ご尽力に改めて感謝申し上げ、ご挨拶といたします。ありがとうございました。